

# 写真行為による差異の考察

丸山松彦

差異は不思議である。ものごとの間に区別する関係を見いだすことができる一方、観点を変えればその区別する関係は変化する。区別する関係は尺度の設定でいかようにも変化することができ、大きくもなり小さくもなる。差異を扱うとき、なんらかの枠を設定することで考えやすくなると思い、写真という枠をあてはめることにした。

写真の差異はどこにあるのか。写真を仕分ける方法はいくつもある。被写体による区別、写真家による区別があげられる。写真による作品を扱うときは写真家に注目することが多い。それは写真作品がつくられる過程を詳しく分析すると、撮影、プリント、編集などいずれの要素も作者の行動に影響しているからだ。写真の固有性は作者の固有性と関係があるといえる。作者に固有性があるとすれば、写真が持つ固有性は作者の固有性の延長上にあるだろう。

では複数枚の写真を用いる写真作品の場合、固有性のある写真が、いかにして集合としての同一性を保てるのだろうか。この場合、作者は何枚かの写真を選び、ひとつのタイトルによってまとめている。作者は複数枚の写真のひとつの固まり、ひとつの枠の中に納めており、作者によってある種の同一性が与えられている。この作品の同一性のうち、作者の行動に依存しない要素に被写体があげられる。写真の仕分けが被写体による分類も可能であることを考えると、作品の同一性を被写体に求めることも可能だろう。

そこで被写体の同一性をそのまま写真にすることはできないだろうか。ものの同一性を複数の写真による作品として成り立たせることはできないか。すなわち、ある風景をひとつの連続した空間ととらえることである。

植物園の温室は様々な設計があるが、似たような景色で

ある。この似たような景色を同一種のものにとらえ写真にして、並べることとした。

作品 loop は温室を写した写真であり、1枚の写真が2分割されている。温室の風景を2枚の写真で撮影し、つなげることでパノラマ写真のようにしている。2枚からなる1枚の写真は隣の1枚の写真とつながって見えるように編集した。1枚の写真の中央には写真と写真を隔てる線が見えるだろう。線を挟んだ両方の写真は別々の写真であるはずが、1枚の写真となって見える。

差異はものの中にあるのではない、ものを見る人間の中にある。見る人間によって差異をもうけるものさしが異なる。人間に固有性や同一性があるとして、その人間のうちにある差異の基準によって差異の有無、程度が決まる。であるならば差異そのものの提示など不可能だ。loop は私にとって被写体=もの(温室)にどのような差異があるのかを示したものである。











「loop」2010年